

深浦校舎図書だより

2 月中に読んだ本の紹介

君か、君以外か。君へ贈るローランドの言葉 (ROLAND／著)

小角 匠斗



「この世の中には2種類の間人しかいない。俺か、俺以外か。」この言葉を耳にしたことがある人は少なくないだろう。この名言は「現代ホスト界の帝王」と称されるローランドの初の著書のタイトルとなった言葉だ。そしてこの本のタイトルを見てもらえば分かると思うが、「俺か、俺以外か。」に次ぐ待望の2作目だ。

中学生の時、国語のテストで「将来の夢」というお題の作文問題が出た。当時からローランドを尊敬していた私は「ホスト」と書いた。その結果、国語の先生と担任に呼び出され、尋問された。被害者を増やしたくはないが、この本はローランドが、世界を少しでも明るくしたいと思って書いた本だ。読んだ人が少しでも明るくなってくれたら本望だ。

1日5分で君は変わる (佐々木 宏／著)

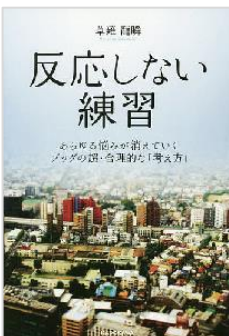
竹内 仁

この本内容は、自分を変えるためにはどういったことをしたら良いのか、きっかけをつかむ方法などが綴られていました。なかでも、「最初から大きな変化を望まなくてもいい。」という言葉を見てとても素敵だと感じました。また、地道に努力し、自分を成長させていくことが大切だと気付くことができました。自分の考え方、生き方について改めて振り返ることができました。私は過去に自分を変えようとし、きっかけがつかめないことがありました。しかし、体づくりをすることにより変えることができました。この本を読むと同時に、過去を思い返すというきっかけがとても重要だったことに気付きました。ぜひ自分を変えたいと思う人は読んで下さい。



反応しない練習 あるゆる悩みが消えていくブッダの超・合理的な「考え方」

(草薙 龍瞬／著) 三上 航平



人は、生活の中で悩みを抱えている。人間関係や仕事のことなど、実に多くの悩みを抱えながら生きている。この本では、仏教を開いたブッダの知恵から、現代の悩みを解決する「考え方」を学ぶことができる。

私はこの本を読んで、人の価値を判断することが悩みを作る原因となっているという言葉に驚いた。判断することで自分や周囲のことを決めつけてしまうのだという。私はこれまで、心の中で多くのことを判断してきた。しかし、これからは人を価値によって判断するのではなく、ありのままの心を見ていこうと思った。

最後に、この本ではまず抱える悩みを「理解」することが解決の第一歩だと語っている。ぜひ、この本を読んで自分の悩みを理解してほしい。

今宵も喫茶ドードーのキッチンで。 (標野 風／著)

岩谷 心愛良

この本は、山奥にあるおひとり様専用カフェの喫茶ドードーの話です。

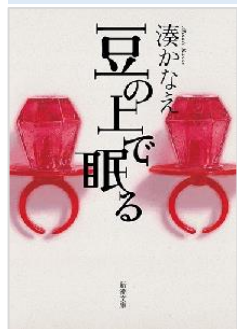
リモートワークなどの単語や、SNSが普及している今の世の中だからこそその悩みなど、この時代を生きている人たちからすると、共感できる部分が多くある話だと思います。

話に出てくる可絵という女性も、SNSや普段の暮らしに少し疲れてしまい、この店に立ち寄りました。そこで店主の人が言った、他人の基準に振り回されて自分を失ってはもったいない、という言葉がとても印象に残っていますし、今後自分にとって必要なことなのかもしれないと思いました。ぜひ皆さんも読んでみてください。



豆の上で眠る (湊 かなえ／著)

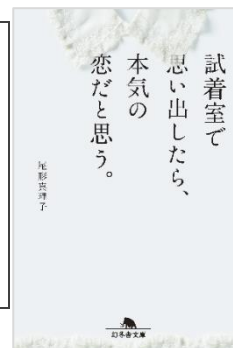
黒滝 真歩



この本は、小学校1年生の時、結衣子の2歳上の姉・万佑子が失踪したミステリー物語です。私はなんでもすぐに信じてしまいます。しかし、結衣子は2年後帰ってきた姉が本物ではないと思い続けています。姉が帰ってきて嬉しいはずなのに、ずっと疑い続けているのは辛いと感じました。この作品で、大事なことは「心のつながり」なのか「血のつながり」なのかを考えさせられました。最後まで読まないで違和感が解消されないの、先が気になって一気に読みたくなる本です。

試着室で思い出したら、本気の恋だと思う。 (尾形 真理子／著) 古川 芹夏

この本は、仕事と恋愛の両立、付き合っている相手が既婚者、歳の差などそれぞれの恋愛で悩む女性たちを描いたものです。彼女たちは悩んでいる事情はそれぞれ違いますが、1つの共通点を持っています。それは同じセレクトショップで服を購入しているということです。そのセレクトショップの試着室で彼女たちは好きな男性のことを思い出してしまうという内容です。彼女たちの恋愛の悩みは、胸が苦しくなったり共感できたりしておもしろいので、ぜひ読んでみてください。



世界を超えて私はあなたに会いに行く (イ・コンニム／著)

斉藤 紫菜



この本は手紙で結ばれている家族の話です。ウニユは1年後の自分に手紙を書き、それをゆっくり届く郵便ポストに投函しました。すると過去のウニユに届き、返事が来ました。そこから手紙のやり取りが続き、2人の距離が近くなりお互いの秘密や家族のことで悩んでいることを打ち明けていきます。

私は手紙でやり取りしたことはありませんが、悩み事や今日あった出来事を家族や友達に話しています。そうすることによって気が楽になるからです。この本を読んで家族に対する気持ちが更に大きくなりました。また、実際に韓国でゆっくり届く郵便ポストが置かれているそうなので行ってみたいくなりました。とても感動した本なのでぜひ読んでみてください。

ひとつむぎの手 (知念 実希人／著)

笹森 優来

この物語の主人公は、心臓外科医を目指し、日々激務に明け暮れていました。しかしある日、3人の研修医たちの指導役を任せられ、3人の研修医のうち2人以上を入局させれば心臓外科医としての仕事ができると言われます。指導や事件に苦労しながらも、心臓外科医を目指す物語です。何よりも患者の命を優先し、ひたむきに頑張る主人公の姿に心打たれました。私自身本気で努力をしたことがないため、自分がやりたいことのために必死で努力できる、この主人公の取った行動に感銘を受けました。何かに懸命に取り組んだことのある人には、とても共感できる作品だと思います。



キッチン (吉本 ばなな／著)

竹内 結南



主人公は、祖母や親しい人を亡くして、苦悩や孤独感を抱えますが、少しずつそれと向き合って前を向いていきます。

心が温かくなるような優しく素敵な言葉がたくさんあり、また頑張ろうと思えます。そして、短編小説なので気軽に楽しむことができ、重いお話ですが、文章が丁寧で分かりやすかったので、あっという間に読み終えることができました。

私は喪失感を抱いて、苦しくなるほどの体験をしたことがありませんが、そうになったらこの本を思い出したいです。

真夜中のパン屋さん～午前0時のレシピ～ (大沼 紀子／著)

中林 千花

この本は、真夜中にだけ開くパン屋に迷い込んだ希実が、同じように迷い込んだ人達と出会いパンを通じて関わり合う中で、様々な事件に巻き込まれていく物語。シンプルに美味しそうなパンの描写の裏で、ネグレクトやいじめ、ジェンダーなど様々な社会問題が背景に出てきていて、タイトルからは想像がつかないくらいに深く重い内容だった。

「美味しいパンは誰にでも平等に美味しい」という暮林の言葉。私はこの言葉がとても好きだ。ただそれだけの事で、自分が抱えている問題も不安も取り除ける訳では無いけれど、どこか救いになる言葉だと思った。息苦しくて進むのが辛い人が、この本をきっかけに少しでも息を整えて前を向くことができるだろう。



あの花が咲く丘で、君とまた出会えたら。 (汐見 夏衛／著)

永谷 来姫



主人公である百合は当たり前の日々に満足せず、何をやるにもやる気がない状態でした。しかし戦時中にタイムスリップをし、現代があるのは、昔、賢明に戦った多くの人たちの犠牲からなっていることを知り、気持ちが変わっていきます。百合は今の私たちと同じ学生であるため、重なる部分がありました。また、私はこの本を読んでいる時に、何度も百合の言葉や想いに共感しました。戦時中を生きた人と現代を生きる人で、特攻隊員であることに対する感じ方が違うことに驚きました。読み終えた時に、当たり前の日常にとても有り難みを感じます。今の若者みんなに読んで欲しい一冊です。

ウチら棺桶まで永遠のランウェイ (Kemio/著)

西崎 未空

この本は書き言葉ではなく話し言葉になっているのが特徴です。

作品の中で、私に響いた言葉がありました。それは、「不安は必須アクセサリー」という言葉です。4月から新生活が始まります。沢山の不安はあるけれども、それは自分だけではなくみんなが感じていることだと思います。新しいことを始める時に不安がない人なんていないと、その言葉を読んでとても共感しました。不安は無くなっても、きっとまた新しい不安がついてくると思います。けれどもそれはアクセサリーだと思ってみようと、この本を読んで感じました。自分を勇気づけてくれるそんな本です。



今夜、世界からこの恋が消えても (一条 岬/著)

堀内 彩名



この本で描かれている物語は、一度寝たら記憶が無くなってしまう「前向き健忘」という病気を持つ日野真織と、普通の高校生、神谷透が恋をする物語です。真織は自分の病気がバレないように、3つの条件をつけて透と付き合います。しかし、ある日透に自分から病気のことを話します。真織が毎日日記を書いていることを知った透は、「明日の日野も僕が楽しませてあげるね」と誓います。

私はそこからの2人の関係性や透の真織を想う気持ちが素敵だと感じました。また、透がとある事情で突然消えてしまうシーンでは、友達や普通に日常生活を送っていることの喜びを再確認できます。感動がたくさん詰まっている一冊なので多くの方に勧めたいです。

君の臍臓をたべたい (住野よる/著)

村上 舞歩

この本は臍臓の病気を患った山内桜良と彼女の病気をたまたま知ってしまった主人公の「僕」との物語です。彼女の病気を主人公が知ったことにより、「山内桜良の死ぬ前にやりたいこと」に付き合わされます。

私は、彼女のように自分の余命がわかっていたら普通に生活ができないと思います。しかしこの本を読んで、生きていく中で嫌なこと辛いことなどたくさんある中で、当たり前のような毎日を生きていけることはとても幸せなことだと思いました。



図書館の本から 沖方 丁/著 光圀伝

光圀とはもちろん水戸藩の第2代藩主徳川光圀のことです。『水戸黄門』のドラマの中では「恐れ多くも先の副将軍、水戸光圀公にあらせられるぞ。」というセリフが印象深いです。が、本当は副将軍という役職はないし、ラーメンを最初に食べた人（本当は違うらしい）として知られていますが、どうしてラーメンを食べることになったのか、なぜ「黄門」というのか、なぜ「大日本史」を編纂したのか、ドラマでは全国を行脚しているが、どうしてそういう設定になったのかなど、歴史に疎い人でもこの作品を読むことで興味をもつことがたくさんあります。また、将軍綱吉との関係、当時の多くの儒学者などが周りに集まってくるという光圀という人となりを知ることは、今を生きる我々にも学ぶべきこともたくさんあります。750ページもあります。ぜひ読んで欲しい作品です。

